

◎ 連合会だより

I C Aの代表団が帰ってきた。大会では、C I C O P Aの主張である非分割積立金が原則の中に取り入れられた。日本の労働者協同組合の法制化にとっても重要な意義がある。スロバキアから阪神大震災への見舞金をいただき、国際的な交流もさらに一步深まった。参加者の詳しい報告が待ち遠しい。

高齢者協同組合講座も、10月1日の北信越を最後にブロック段階では、一区切り。いよいよ、高齢者協同組合の活動の開始の段階に入ってきた。愛知は、850人の参加で9月15日設立総会を成功させ、三重は「生協認可」記念のレセプションを10月9日におこなった。

沖縄の動きがなかなかだ。賛同者は、1800人を越えた。設立総会のときは430人だったので、この1ヶ月ののびはすごい。

そののびの理由を象徴する話がある。

自殺を考えたおばあさんから手紙が来て、竹森

専務が直ちに出かけていき、じっくり話をした。そして、そのおばあさんは、ヘルパー講座に参加することになった。そこにそのおばあさんの生きる希望が見える。ヘルパー講座には、定員の2倍をこえる受講希望者が申し込んできている。

「高齢者協同組合の構想はわかるが、どこからはじめていいかわからない」「福祉はやっぱりもうからない、人と金を準備するのが大変で手がつかない」等々、とりくもうとする人々の悩みも多い。沖縄の動きは、そうした悩みへの実践的な答えになっているといえよう。

青森の協同集会在11月はじめ、北海道の協同集会在12月はじめに予定されている。来年、東北で予定している「東北集会」の準備打ち合わせを行った。ビガファームの加盟にも励まされ、大きな構えで、参加目標を1000人とし、年内に実行委員会を発足させることになった。

鍛谷 宗孝(労協連合会・専務理事)

◎ センター事業団だより

盛岡赤十字病院で半期のまとめと今後の方針協議が、病院の総務課・施設課・看護部の代表との間で話し合われた。当初の期待になかなか応えられない現実があり、契約継続の危機もささやかれる中での協議であった。全体的には全貌把握とこれに基づく方針について評価をいただき、問題意識を共有して新たなスタートを切る事となった。中心的な課題は、長年にわたって前業者の中でつくられてきた人間関係の崩壊と病院職員との卑屈なまでの従属関係の払拭にある。この点で、情報を共有し、話し合い、確認し合う半期の取り組みは、多くの変化を職場と組合員にもたらしている。しかし、まだまだこれからが正念場で、正当な仕様・対等な立場で病院と接する中で、病院を愛し、地域を愛すると言う意識に根ざしたよい仕事の実現に期待が集まっている。考えてみれば、組織づくりや社会的課題は膨らむ一方であるが、いつも根本に「よい仕事」をめぐる組合員の意識

や主体性、つまり「雇われもの根性」をどう変革して行くのかが、問われている。なかなか見えづらく一足飛びに行かない改革であるが、これを示し得たときに、本物の病院づくりを担うスタッフとしての認知が始まり、社会的に認知の土台となるのだろう。この事に理解を示してくれた病院の方々に感謝しつつ、身が引き締まる。全国の期待を担って、盛岡赤十字での大飛躍が決定的な意味を持っている。産消連帯のネットワークづくりも始まる。これに呼応して、多くの生産者が我々の仲間入りをする。我々の存在の価値・事業の価値をもう一度見つめ直し、急加速する社会情勢の流れを引き寄せる営みを、11月の代表者会議でしっかり確認し、第8次123運動への方向性を示していきたい。組合員の成長・発達と事業所が地域の貴重な存在へと発展する事と結んで。

古村 伸宏(労協センター事業団・事務局長)